

## 博士学位論文審査報告書

## Summary of Doctoral Thesis and Report of Examination

研究科長 殿

下記のとおり、審査結果を報告します。

To the Dean:

We report the result of Examination for the Doctoral Thesis below.

学籍番号 Student I.D. No.: 4008SS003-8-学生氏名 Name: Christian WIRTH和文題名 Title in Japanese: 日中関係における伝統的及び非伝統的安全保障協力の結合  
: 新しい北東アジアの構成英文題名 Title in English: The Nexus Between Traditional and Non-traditional Security  
Cooperation in Japan-China Relations

記

## 1. 口述試験参加教員 Faculty Members Involved in Oral Examination

## ① 審査委員会主査 Chief Referee of the Screening Committee

氏名 Name: 天児慧 印所属 Affiliated Institution: 早稲田大学アジア太平洋研究科資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

社会学博士 (一橋大学)

## ② 副査 (審査委員 1) Deputy Advisor (Member of Screening Committee 1)

氏名 Name: 赤羽恒雄 印所属 Affiliated Institution: モンレー大学資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

PhD

## ③ 審査委員 2 Member of Screening Committee 2

氏名 Name: 植木千可子 印所属 Affiliated Institution: 早稲田大学アジア太平洋研究科資格 Status: 教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

PhD (MIT)

## ④ 審査委員 3 Member of Screening Committee 3

氏名 Name: BACON, Paul Martyn 印所属 Affiliated Institution: 早稲田大学国際学術院資格 Status: 准教授

博士学位名・取得大学名: Ph.D. Title Earned・Name of Institution

PhD ケント大学2. 開催日時 Date / Time: (Y)2011 / (M) 5 / (D) 24 (Time) 2 <sup>Period</sup>時限 ~ <sup>Period</sup>時限[時限 / Period] 1<sup>st</sup>: 9:00-10:30, 2<sup>nd</sup>: 10:40-12:10, 3<sup>rd</sup>: 13:00-14:30, 4<sup>th</sup>: 14:45-16:15, 5<sup>th</sup>: 16:30-18:00, 6<sup>th</sup>: 18:15-19:45, 7<sup>th</sup>: 20:00-21:303. 会場 Venue: 19goukann 7104. 合否判定 Result: 合/Passed・否/Failed (該当する方に○ Circle as appropriate)

5. 添付資料 Attached document(s)

4 枚 pages (和文4,000字程度、もしくは英文1,500語程度。ただし、論文題目のみは、和文・英文を併記すること)

(Approximately 4,000 characters in Japanese, or 1,500 words in English. The Doctoral Thesis title, however, must be written in both Japanese and English.)

# 博士論文審査報告書

学生氏名：Christian WIRTH

学籍番号：4008S003-8

題名 Title The Nexus Between Traditional and Non-traditional Security Cooperation in Japan-China Relations

日中関係における伝統的および非伝統的安全保障協力の結合

## 一、概要

本論文は、1990年代から今日の日中関係で起こった幾つかの重要問題をめぐる両国関係を、大臣レベル、外交官レベル、ワーキンググループレベルにわけながら、それぞれのやり取りを詳細に分析し、新機能主義と相互関係主義の地域主義に関する説明方法に接近した考え方を基にしながら、非伝統的安全保障分野の問題をめぐっての東アジア地域協力は伝統的な安全保障問題よりも成果を上げやすく、政府間の政治的信頼の構築に貢献していることを論じたものである。

まず、ここでのリサーチ・クエスチョンとして、日中間の非伝統的安全保障 이슈における協力は、どのような条件のもとで、あるいはどのようなメカニズムを通して伝統的な安全保障 이슈における関係の改善に貢献できるのかという問いが設定されていた。

本論文の構成は以下のとおりである。

## 論文構成

## CONTENTS

### Preface

1. Introduction
2. Explaining Conflict and Cooperation in Northeast Asia
3. Methodology
4. Cooperation in the Area of Traditional Security at the Diplomatic Level
5. Cooperation in Traditional Confidence and Security Building Measures
6. Environmental Security Cooperation at the Diplomatic Level
7. Environmental Security Cooperation at the Ministerial Level:  
The Tripartite Environment Ministers Meeting (TEMM)
8. Environmental Security Cooperation at the Working Level: The Northwest Pacific  
Action Plan (NOWPAP)
9. Environmental Security Cooperation at the Working Level: The  
Evolution of Fishery Cooperation

10. **Traditional and Non-traditional Security Cooperation and Their Difficulties Compared**
11. **The Limited Advantage of Non-traditional Security Cooperation: Implications for the Study of Regional Cooperation and Integration**

## **Appendices**

- I. **Overview of Interaction at the High Diplomatic Level**
- II. **Security Dialogues and Defense Exchanges Between Japan and China**

## **References**

## **二、各章の説明**

第1章は、イントロダクションの部分で、北東アジアにおいて経済の近代化が加速・拡大され、それに伴って非伝統的安全保障の 이슈が浮上し、地域協力の不可避性が増大してきたことが論じられたうえで、本研究の基本的な構想が提示されている。

第2章では、北東アジアの分析にあたって、これまでの国際関係理論、特にリアリズム、リベラリズム、そしてコンストラクティビズムがどのように分析してきたか、その長所と弱点などを指摘し、同地域の国際関係のダイナミズムの構造をどのように考えるかを論じている。

第3章では、まず同地域における伝統的安全保障と非伝統的安全保障の連関性を明らかにすることに関心を示し、そのためには特に重要な意味・役割を持つ日本と中国の関係にフォーカスすることを論じている。さらに、コンストラクティビズムのアプローチから、冒頭で指摘したリサーチ・クエスチョンを提示している。さらにキーワードとなる概念の定義、分析対象の時期、ケーススタディの選択、データ収集のプロセス、本研究の持つ本質的な困難性と限界性などを明確に指摘している。

第4章では、1990年代から現段階までの日中関係の伝統的安全保障をめぐる 이슈についての国家・外交レベルでの対立、交渉、調整のプロセスを論じている。冷戦後の1990年代初期の日中の安全保障戦略の再調整を国内的要因と国際構造の転換から描き、続く90年代後半における中国の新安全保障戦略の形成と日本の対応、さらには2001年から06年にかけての「小泉靖国参拝」に見られる歴史問題の浮上の意味、その解消に乗り出した両国の外交レベルでの協調の試みを論じている。

第5章は、1970年代のHolst, Melanderらから始まるConfidence and Security Building Measures (CSBM) の理論を手掛かりに、日中間で原初的なSCBMの形態に類似した定期的な安全保障対話が形成され、機能するようになってきたと判断し、それを踏まえ、それらの特徴をマルチの関係、バイの関係から分析している。そしてこれらは次第に頻繁に行われ、かつ議論も深まって入るがCSBMそれ自体を実質的に進展査褪せたかといえれば必ずしもそうではなかったと判断している。

第6章は、非伝統的安全保障における環境安全保障が外交レベルでどのように扱われ、進展していったのかを、北東アジアの全般的な状況、さらには日中2国間対話などについて論じ、少なくとも外交レベルでは単なる環境保護に対して有効であっただけでなく、両

国の政治的環境の改善をも促進したと指摘している。

第 7 章では、1999 年より始まって今日に至っている大臣クラスの日中韓の環境安全保障協力会議(TEMM)を、本会議のコミュニケなどの他に、合同訓練プロジェクト、合同環境教育ネットワーク、大気汚染防止プロジェクトなど様々な重要項目もカバーしながら、系統的に詳細に分析している。

第 8 章では、1994 年に国連環境プログラムの一環として始まった日中韓のワーキングレベルでの環境安全保障協力(NOWPAP)を分析対象にし、そのメカニズムおよび漸進的な発展のプロセスを考察し、その最大の成果は北東アジアにおけるオイル、有害物資の拡散防止の地域的な MOU になったと指摘している。

第 9 章では、大臣レベルとワーキングレベルにおける海洋安全保障のマネジメントと実施をめぐる考察を行っている。1990 年代の北東アジアにおける漁業管理をめぐる日中韓のやり取りを概観した上で、1997 年に締結した日中 2 国間漁業協定の特徴、問題を検討し、さらに海洋法実施をめぐる実務レベル交渉などのプロセスを明らかにしている。

第 10 章では、伝統的安全保障における協力と非伝統的安全保障における協力を比較の視点から整理している。すなわち伝統的安全保障、海洋安全保障、環境安全保障の 3 つの 이슈でそれぞれの協力進展、協力の地域依存、日中協力の障害、地域協力の評価という面から具体的に特徴を明らかにしている。

第 11 章は、安全保障をテーマとし、アイデンティティ、コミュニケーションがアクターのそれぞれのレベルでどのように進み、そして協力の形成をめぐるどのような展開が見られたのかを総括している。

### 三、評価と問題点

国際関係論のさまざまな 이슈をどのように解釈するのかということが、これまでホットな議論であり続けてきた。今日的に言えば、リアリズム、リベラリズム、コンストラクティビズムのどの立場をとって解釈するかといった議論である。著者はその中で最も実証が難しいと思われるコンストラクティビズムの立場に基本的立ちながら、上記のような分析を行ってきた。扱った範囲は北東アジア、具体的には日中関係および日中韓関係、時期としては 1990 年代から 2000 年代の 20 年間、イシューは伝統的安全保障と、環境、海洋問題の非伝統的安全保障、主体のレベルは首相、外相など大臣レベル、外交当事者レベル、ワーキンググループの 3 つのレベルである。これほど広範囲にわたる対象をどのように整理分析するのが、本論文の第 1 のポイントであった。

この点で、むしろ後述するようにさまざまな限界性・問題点はあるものの、本論文の構成がロジカルに組み立てられている。また、扱った資料は、基本的には日本外務省、中国外交部、新聞、新華社通信など公式の資料に依拠しており、かつ本人が試みたインタビューも必ずしも新しい知見を発掘するほどの深みのあるものではないが、整理がしっかりされているので広範囲にわたる対象の連関性が見えてきて、論文全体の流れ、起承転結の展開がしっかりしていると判断された。また例えば、第 7 章の日中韓の大臣会議の分析など、資料的には一般的であるが、きわめて系統的で詳細な分析は従来にはなく、彼のオリジナリティの一端となっている。

また、伝統的安全保障と非伝統的安全保障の関係を明らかにすることにチャレンジし、安全保障にとって社会とのコネクションの重要性があること、それゆえに社会的ラーニングのプロセスを理論的に説明したこと、さらにそうした試みを安全保障共同体に結びつけて議論を展開したことなど評価すべき点は少なくない。

また、日中というユニークな2国間関係の伝統的、非伝統的安全保障を単にナショナルなレベルだけでなく、リージョナルなレベルに広げて分析を行い、さらに理論的、機能的にアプローチし特徴を描き出したことは評価できるという意見もあった。

しかし問題点として、最初に提起したリサーチ・クエスチョンに対する答えが十分明確に出されたのかという疑問が出された。この点は確かに見過ごすことのできない問題である。結論部分で自ら提起したクエスチョンに的確に答えているとは言い難かった。しかし、幾つかの章の中でクエスチョンに対する自らの考えを部分的に答えているところもあり、また現段階の研究でこの問いに明確に答えることはそもそも困難である。非伝統的安全保障の 이슈がどのようにして、あるいは如何なる条件で伝統的安全保障にスピルオーバーするのかなど、より掘り下げた理論研究、事例研究が必要となる。したがって、今後の継続的な課題として考えてもらうこととした。その他、幾つかの点で概念上の不明確さ、実証性の不十分さなども指摘された。

#### 四、結論

以上のような評価と問題点を踏まえて総合的に考えるならば、安全保障研究分野においても、北東アジアにおける「平和構築」という実践的な課題を考える上でも大変重要な問題を扱い、しかも理論的、あるいはシステムティックな枠組みを用いて考察し、一定の説得性のある結論を導き出した。こうした本論文は、従来あまり扱ってこなかった北東アジアの非伝統的安全保障という分野の研究にフォーカスしており、オリジナリティも豊かで、かつ学術的意義が大きいものであると判断することができる。

以上のようにその問題設定、分析アプローチ、実証的な考察のプロセス、結論などにおいて博士学位論文の基準を十分に満たしている。論文審査委員会一致しては博士学位に値すると判断し、博士の学位授与を提案する。

2011年5月24日

博士学位申請論文審査委員会